カム・ホーム

増田みず子
masuda mizuko

カム・ホーム

増田
みず子

福武書店

増田みず子（ますだ・みずこ）
一九四八年、東京に生まれる。七三年、東京農工大農学部植物防疫学科卒。七七年、「死後の関係」が第九回新潮新人賞候補作となる。七八年、「個室の鍵」「桜寮」が、七九年、「ふたつの春」「慰霊祭まで」が、八一年、「小さな娼婦」が、八三年、「内気な夜祭」が、それぞれ芥川賞候補作となる。八五年、「自由時間」で第七回野間文芸新人賞を受賞。八六年、「シングル・セル」が第一四回泉鏡花文学賞を受賞。他に著書として「麦笛」「道化の季節」「自殺志願」「独身病」「家の匂い」「二十歳・猛獣」「降水確率」「禁止空間」などがある。

カム・ホーム

一九九〇年一二月一〇日　第一刷印刷
一九九〇年一二月一五日　第一刷発行

著者　増田みず子
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒一〇二　電話（〇三）二三三〇―二二三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　大日本印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）
（定価はカバーに表示してあります）

©M.Masuda 1990
Printed in Japan

ISBN4-8288-2366-2 C0093
NDC913 194 248p

カム・ホーム

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その話が持ちあがるまでは、ユリと両親の家族三人、とても上手に暮らしていた、と思う。だが思わぬところから、トラブルが飛びこんできた。おかげでせっかくの平和が、急速に、そして大幅に乱れることになった。

つまり、事情が複雑にこみいっていて、他人にはこっけいとしか思えないだろうが、ユリにとっては家庭の平和は非常に大切なものだったのだ。それが乱れるのは重大問題だった。おおげさ、といわれたくない。

ユリも、正直いって他人のことはどうでもいいが、自分のことになればたいていのことは重大なのである。そして他人は多くの場合、トラブルメーカーの役しか果たしてくれない。

ユリの平和を乱した張本人、修の姿が、窓の外に見える。両手をズボンの尻ポケットに突っ込み、背中を丸めて、あらぬ方を眺めている。

新幹線が発車するまで、修はそうやって、ホームで待っているつもりなのだろう。彼の姿はひいきめに見ても魅力的とはいえない。男としては色が白すぎるし、全体にしまりなくふくらんで、そ

1

れが自分の叔父でなければ薄気味悪いと思うかもしれない。表情に乏しい人だから、よけいにむくんだ感じに見える。

あと数分で発車である。

ユリは、これから先も好きになれそうもない修から眼をそらして、隣にすわっているサヨの様子をうかがった。サヨは、ようやく念願かなっての旅行だというのに、冴えない顔をしている。ほとんど喋らないし、笑わない。実は、持て余している。

ユリは昨夜から修の家に泊まりこんで旅行に備えたのだが、サヨはゆうべからずっとそんなふうだ。何を話しかけても、「そうかい」という返事しか返ってこない。そっけないというのではなくて、それ以上答えられないのが申し訳ないとでもいいたげな、何となくおずおずした感じがある。

ユリは、昨日、修の家にあがりこんだときから、この役を引き受けたことを後悔していた。ホームに修がいる今のうちに、サヨを放り出して家へ逃げ帰りたい心境なのだ。

長いこと会わずにいた間に、サヨは別人のように卑屈な感じになってしまっていた。ユリはどう接すればいいのか、昨日から途方にくれ続けている。

もちろん、ここまで来たら出かけるしかない。それはわかっている。珍道中になりそうな予感ははじめからあった。悲惨な、といいかえてもいい。それを覚悟の上で、来ているのだ。

なるようになれ、というようなやけっぱちの覚悟ではあったけれども、それでもやっぱり、この計画が中止にならないかと思う。

いろいろと事情がからみ合ったあげくの出発で、そのこじれた感情をあらわすように、駅にいる三人の表情はそれぞれに重苦しい。

なにしろ、七十五歳のサヨが、四十年も帰っていない「いなか」へ、里帰りすることを思いつい

たのはまだいいとして、その付添い役を振り当てられたユリは、二十歳にもなろうというのに、旅行どころかまだ外泊の経験さえないというあまりの箱入り娘ぶりなのである。なさけないことに、旅行の経験は修学旅行だけだった。

しかもこの祖母と孫娘は、昨日、丸七年ぶりに会ったのだ。

ユリの母で、サヨの実の娘である登志子が、

「おばあちゃんが旅行したって話、そういえば聞いた覚えはないわねえ。いつも家にいたみたい」

と首をかしげたほどだから、サヨの方も似たようなものだろう。そしてユリはさっきから、今乗っているこの新幹線が、ヘンな方向へ走り出して止まらなくなったらどうしよう、などとつまらない心配をしている。

そういうわけで、ホームでつまらなそうに発車を待っている修は、付添いの付添いという、とんでもない役回りでそこにいる。

彼が不機嫌そうに見えるのは、それが彼のふだんのふつうの顔つきであるらしいことのほかにも、そういった理由がある。見えるだけでなく、ほんとに不機嫌だという可能性もかなり大きい。理由はまだある。

いくら人材不足だったとはいえ、これほど世話の焼ける面倒な相手もいなかったことだろう。いっそ自分が行った方がよっぽどラクだった、と修は内心で苦虫を噛みつぶしているにちがいない。

彼はこの旅行計画に振り回されていた。いろいろと無駄に奔走させられたあげく、やっと出発までこぎつけたのに、嬉しそうな顔をする者は誰もいないのである。

せめてサヨがウキウキしてくれればいいのだが、むしろ沈んで、むりやり行かされるような顔をしている。行きたくないといいださないのが、まだましかもしれなかった。

彼にとっても、とんだ災難としかいいようがないのだろう。彼は今、誰をいちばんうらんでいるのだろうか。

半年前だか一年前だかに、サヨが急に「いなか」へ帰りたい、といいだした。それが発端である。修ははじめの頃、その望みを適当に聞き流していたが、サヨはあきらめず、かえってだんだん郷愁をつのらせるような感じになっていったらしい。

修は新婚だったし、勤めも休めなかった。

それで今年の四月になって、ユリの母親のところへ相談の電話がきた。

「バアさんがうるさくてかなわないんだ。年寄は頑固だから、いってきかせても埒があかないし、こっちもつき合っちゃいられないし、どうしたもんかね。バアさん、歳でとうとうおかしくなっちまったんだろうか」

そんな内容だったらしい。ところが相談した相手が悪くて、それからが大変だった。そのいいぐさは何なの、というようなことから始まって、彼の年の離れた姉は、ふだんのうさを晴らすように、さんざん彼をやりこめた。すったもんだのあげく、最終的に、サヨにユリがついていくということになったのだが、大事な箱入り娘を二週間もの長旅の付添い役として貸し出すについて、登志子は口うるさいほどこまかく注文をつけた。その注文が、それがなかなか、修のような性格の者には、負担だったようだ。

当日の朝、修が二人を駅まで送って、新幹線が発車するまできちんと見守るのも、条件の一つだった。そのために彼が勤めを半日休むことになろうと、「そのくらい、当たり前でしょ」と登志子は取り合わなかった。

向うへのみやげは、すでに彼が別便で送ってあるはずだったし、向うへ着けば駅の改札口まで、

人が車で迎えに出ているはずだった。彼は前払いでユリにアルバイト料を渡さなければならなかった。それは昨夜のうちに受けとってある。多少、遠回しに登志子へのいやみも添えられてはいたが。

そのほかにも修は、サヨとユリが向うに滞在している間、三日に一度は電話を入れて二人の様子を聞き、それを折り返し登志子に電話報告するという義務を負っている。向うでサヨの体の具合が悪くなったら、ただちに迎えに行くのも条件である。むろん二人の出発を見送ったあとに、彼は第一報を登志子に入れなければならないことになっているのだろう。修がむっつりしているのも仕方がないのだ。

確かに、これではまるでユリを借り受けるありがたみが半減する。修が疑っているように、単に登志子のいやがらせかもしれない。

「登志子姉ちゃんは、一体何か、俺にうらみでもあるのかね。それとも毎日あんな調子なのか？だとしたらお前も大変だな」

口の重い修が、昨日顔を合わせたとたんに、早口でユリにそういった。七年会わなかった間に、中学一年のユリが大学二年の二十歳になったことへの感想や感慨の類の言葉は、彼の口からはまだ出ていない。登志子から受けた攻撃がよほどこたえているらしかった。

登志子には登志子の事情がある。それをユリは修に説明することができない。本来、修が気をきかせて察してくれるべきことなのである。ユリも登志子の味方をするわけではないが、修の感受性を少々疑っている。

ユリはユリで、修におおいに被害をこうむっているのだ。修から電話がかかって以来、登志子はひどく怒りっぽくなってしまった。修のいうとおり、登志子は修にうらみがあるのだろう。それを

思いださせるような電話を修がかけたのである。
どういえばいいのか、ユリは、昔から登志子の機嫌をとることを、自分の生まれつきの役目のように感じている。登志子の機嫌がいいと無性に嬉しくなるのだ。さすがに家族だけのことはあって、登志子も父もユリのそういう役割意識を敏感に察してくれ、なかなかいい調子で協力してくれたから、今まではその努力がいい具合にむくわれていたのだった。
ユリはひそかに、自分たちはある一つの小さな犯罪を一致協力してやりおおせたあとの共犯者どうしみたいなものだ、と考えている。自分たちのおかした犯罪を忘れ、安楽な余生をめざして、肩を寄せ合い仲良く暮らしているような気分だった。三人の意気投合している感じが、ユリはとても気に入っていた。
それを修の電話がだいなしにしたのだ。
けれどもちろん、そういう性質の、つまり見せかけの平和というのは、外部からのちょっとしたニュースで崩れる運命にあるものなのだろう。
それからもうひとつ登志子のために弁明するなら、ユリはアレルギー体質で、体調が悪くなるとやっかいな症状が出るのだった。もともときゃしゃな体だ。少し無理をするとすぐ使いものにならなくなる。肌あれ、痒いブツブツ、発熱。体全体がはれぼったくなり、赤くなり、湿疹ができる。アレルゲンは、睡眠不足、疲れ、過度の緊張、運動のしすぎなどである。年に二度くらいは、それでダウンする。
「大変なこと嫌いアレルギー」だと両親はいってからかうが、その両親から遺伝子を受けついだユリの生まれつきの体質である。トラブル嫌いの両親の遺伝子が相乗効果を発揮しただけのことだ。
その体質も、今回登志子がユリを出し渋り、さらに様々な注文をつけて過保護状態にした理由の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

重要なひとつなのだった。
「体が弱い弱いって、さんざんおどかしていたけど、何だい、元気そうじゃないか」
修はユリを見て、不満そうにいった。その修の、不健康にむくんだ姿にユリは驚いた。
ユリは困ったように笑ってみせただけだった。修はもっと人の言葉や感情を深刻に受けとめるべきだ。
登志子は、修のやることなすことが何もかも気に入らないという様子だった。うるさく条件をつけたのは、修の仕事を増やしてヘトヘトに疲れさせてやろうという気持から出たもののようだ。
その気持はユリにもわからないでもない。ユリも彼が苦手だ。会っているとだんだん気が滅入ってくる。
登志子が決めたことだから、修に文句をいうわけにはいかないが、彼の家に一泊したり、見送ってもらったりするのは、かえって迷惑のようなものだった。
子供の頃は口をきく機会もないままだったが、大人になって一日つき合っただけで、登志子が彼を昔から嫌い続けてきたのを納得できる気がした。
彼がユリに囁いた致命的な言葉がある。
「泉がいれば頼みやすかったんだけどな」
それを聞いてユリは、この人はダメだ、とつい思ってしまったのだった。
もしかすると修は、電話で登志子にも同じようなことをいったのではないか。だとしたら、どうしようもない人だ。
「あれは何しろバアちゃん子だったからなあ。要するにあれだろ、泉もきついところがあったから、おっかさんとけんかばかりしてたんじゃないか？　それで飛びだしちまったんだろう？……バ

アさんがたまに、泉がちっとも遊びに来ないと文句をいってるよ」
登志子にやられた腹いせのつもりででもあったのだろうか。修とは、会話がなりたつような気がしない。
人の気持を考えなさすぎるところがある。
ユリの一家がサヨの家（当時はまだ修の家ではなく、実質的にサヨの家だった）へ遊びに行かなくなったのは、泉の事件があってからのことだ。登志子は泉のことを人から詮索されるのを極度にいやがって、家に閉じこもるようになった。ユリが近所の子供と遊ぶのさえ、いやがった。
実はユリ自身は泉の失踪についてほとんど何も知らない。泉は消えたのだ。少なくともユリの住んでいる世界からは。それ以上のことは別に知りたいとも思わない。
もう七年になる。忘れてしまっていい頃だ。
泉があけた穴は、ユリが時間をかけて、ていねいにふさいだ。ユリはとっくに一人娘のような気分になっている。
もともと別の世界で別のことを考えながら暮らしていた人だったと思う。泉を、姉だと感じたこともあまりなかった。気持も言葉も通じなかった。母といい争いばかりしていた泉は、七歳下のユリには眼もくれなかったし、家に帰らない日も多かったから、彼女がいつの間にかいなくなっても気にしなかった。彼女が帰って来ないとわかったときに、むしろほっとした気持になったのを覚えている。
外国へ留学したとか、結婚したとか、独立して何かをやっているとか、いろんな噂が近所の人たちの声を通じてユリの耳にも入ってきた。どれが嘘でどれが本当でも構わなかった。ユリは泉が好きではなかった。もしかすると修と同じくらい、嫌いだった。登志子の神経をいらだたせるもの

は、ユリも好きになれなかった。
ユリの外出嫌いは、泉が原因なのかもしれない。母親にべったりとくっついて家にいるのが自分の分担、とごく小さい頃から思いこんでいる。
そのこととは矛盾するけれど、ユリは今度の旅で、サヨから泉のことが何か聞き出せるのではないかという期待もひそかに抱いていた。登志子と修が電話でもめている最中に、ユリは漠然と、泉のことが聞けるかもしれないから行ってもいいな、と思っていた。自分でも意外な心の動きだった。もちろんそんなことを登志子にいえるはずはなかった。登志子はその頃、修が自分でサヨを連れていくのが常識だというようないい方をしていたのだ。
それがそのうち一転した。
現実に自分が行かされることになると、ユリは何だか登志子に裏切られたような気がした。泉のかわりをつとめてきなさい、と登志子にいわれたような気持だった。
修もいっていたが、泉は子供の頃から、よく一人でサヨの家へ泊まりに行っていた。ユリも覚えている。サヨの家へ遊びに行けば、サヨのそばにはいつも泉が張りついていた。ユリは登志子のそばを離れずに、そういうサヨと泉を遠くから眺めていた。泉がそんなふうに誰かに甘えかかっている姿は、サヨの家でしか見られなかった。登志子とユリのウマが合うように、サヨと泉も顔をそむけたくなるほど仲が良かった。泉がサヨの初孫だということもあったのだろう。ユリは、自分がサヨにとって何番目の孫にあたるのか、知らない。サヨも知らないのではないか。ずっと、サヨは泉のものだとあきらめていたから、あえてサヨに近づこうと試みたこともない。ユリと泉はそれだけ違う。
サヨと泉は切り離せない。

だから泉がいなくなったあと、登志子はサヨの家へ行こうとしなくなったのだ。
誰が何といおうと、この役は泉のものだ。もしここに泉がいればの話だが。ところが泉はいない。
サヨの元気のないのは、それがわかっているからなのだろう。
飛んで火に入る夏の虫だ。どうせならサヨに何か泉のことをいわれる前に、こちらから聞いてやろう。登志子のいないところでなら、泉のことがいくら話題になろうと、ユリは構わなかった。もちろん無理に聞き出そうとは思わない。サヨが話したがったら、という程度だ。けれどほかに共通の話題を見つけられるかどうか自信はなかった。それにたぶん、サヨと仲良くするには、避けて通れない話題なのだ。
ユリとしては、一人ずもうのような気がしなくもないけれど、サヨの同行役を引き受けるにはそのくらいの覚悟はとりあえず必要だった。

ようやく発車の合図があった。さっきから、修ののっぺりした白い顔が、窓ガラスのすぐ向うからこちらを覗きこんでいる。ユリは眼のやり場に困りながら、永遠に発車しないのではないかとじりじりしていたのだ。サヨは知らん顔をしているし、眼の前には、見るだけで胸がつかえそうな弁当の山がある。何のつもりか、修は三人前の弁当を売店で買ってきて、そのまま置いていったのである。ユリはまだ、むりにのみこんできた朝ごはんが喉につかえている状態だった。二時間半もあれば着いてしまうのに、その間にどうやって弁当を食べろというのか。
しかしともかくもこれで修からは解放される。彼につき合うという気づまりな仕事がひとつ片づいたわけだった。

気がつくと、サヨは窓に向かって何かを追い払うように、手を振っていた。虫でもいるのかとそちらへ眼をやって驚いた。動きだしている列車を追って、修がホームを走っている。
列車はスピードをあげ、修の姿はたちまち置き去りにされた。
彼が窓から消えたあと、ユリは思わずサヨを見た。
わけのわからないものを見てしまった気分だった。眼の錯覚だったのかもしれないが、修の姿が窓から消える間際、ふだんは半分眠っているような彼の眼が一瞬大きく開いて、サヨをいつくしむ色をありありと浮かべたのだった。何だか、せっぱつまった雰囲気さえあった。
修はほとんど衝動的に何かを感じて、そこから湧きあがった気持をサヨに伝えようとしたかに見えた。
たとえば、サヨがそのまま二度と旅から帰れなくなるような予感とか……。
まさか。ユリは慌ててそのつまらない想像を頭から追い払い、そわそわした思いで車内を見回した。
まだ、自分の座席を探して通路を歩いている人が何人もいた。だが満席にはほど遠い状態で、そのせいか少し冷房がきつすぎるようだった。サヨに風邪をひかせては大変である。
「おばあちゃん、寒くない？」
ユリがたずねるとサヨは、きちんと膝に手をあててすわったまま、首だけを大きく横に振って否定した。何だかとりつくしまがない。
今朝、出がけに修は、
「バアさん、途中で面倒なことをいいだして、ユリを困らせるなよ。そんなことすると俺がユリのおっかさんにどなりこまれるからな。ユリも、もしバアさんがわからないことをいいだしたら、聞

こえないふりして構わないからな。ほっとけばいいからな」
二人にそんなことをいってプレッシャーを与えた。サヨはそれを気にしているのかもしれない。それとも怒っているのだろうか。黙りこんだまま、顔を窓の方へ向けている。「むっつり」なのか「しょんぼり」なのか、ユリには見分けがつかない。
話しかけにくかった。登志子の機嫌取りなら慣れていて苦にもならないが、サヨの気持は見当がつかないのである。
「私、少し冷えるから、カーディガンを出そうと思うんだけど、おばあちゃんも何か、はおるものを荷物から出しましょうか？」
しかたがないからユリは立って、網棚の荷物に手を伸ばしかけながら、なるべく何気ない調子で聞いた。サヨはユリを見あげ、自分の膝のあたりを少しさするような動作をした。
「そうかい。冷えるかねえ。でも私はいいよ。どうせおばあちゃんの荷物にはそんなものは入っちゃいないから」
「見てみるわ」
「ユリがあったかくしてくれていれば、私はいいよ」
ユリはためらったが、結局自分の荷物だけおろした。重くて腕がしなりそうだ。中身は着替えだけだが、二週間分だから、ぱんぱんにふくれている。そこから薄手のカーディガンと、ちょっと考えて、タオルを一本引き抜いた。
タオルを二つ折りにして、そっとサヨの膝にのせた。やせて小さなサヨの薄い膝はそれだけですっぽりとおおわれた。
「心配性だねえ、ユリは登志子に似たのかね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com